

心理的ケアを受けていない被虐待児における

家族イメージの変化に関する事例検討

—KFDとRKFDの比較を通して—

A case study about the change of the family image in the ill-treated child
who does not receive psychological care
—Through a comparison between KFD and RKFD—

小西 一博¹

¹高岡市立五位小学校

Kazuhiro Konishi¹

¹Takaoka City Goi Elementary School

3516 Uchijima, Takaoka City, Toyama, 933-0328 Japan

キーワード：被虐待児，家族イメージ，動的家族画，回想動的家族画，事例検討

Key words : Family image, Ill-treated child, Kinetic family drawings,
Retrospective kinetic family drawings, Case study

抄録

本研究では幼児期に虐待された経験をもつが、心理的ケアを受けていない8歳の女兒を対象にして動的家族画（KFD）と回想動的家族画（RKFD）を実施し、虐待を受けた過去と虐待されなくなった現在の家族イメージがどのように描画に反映されてくるか、それはどのような変化を示すのかについての知見を得ることを目的とした。KFDとRKFDを比較すると、共通する特徴として人物像の省略が見られた。彼女は敵意や嫌悪感を抱く家族成員を描画上に敢えて描かないことで不仲な関係を表現した。また、KFDとRKFDの両方で家族関係の不和を強調するように包囲を用いて巧みに家庭内での様相を表出されていた。このことから、表層面では家族成員とうまく生活しているように思われるが、深層面では多く課題が彼女に累積されていると言えた。被虐待児にかかわる支援者は、表面的に評価するのではなく、子どもの心の奥底にある叫びにも目を向ける必要があると考えられた。

1. 問題と目的

「平成 29 年度子ども・若者の状況及び子ども・若者育成支援施策の実施状況」（内閣府，2018）¹⁾によると、全国の児童相談所における児童虐待に関する相談件数は、児童虐待防止法施行前の平成 11 年度に比べ、平成 28 年度には約 10.5 倍に増加している。同様に、警察庁による「平成 30 年上半期における少年非行，児童虐待及び子供の性被害の状況」（2018）²⁾によると、児童虐待の被害児童の数が統計開始以来最悪を記録した。通告児童数の内容をみると、「心理的虐待」が 26,415 件、「身体的虐待」が 6792 件、「怠慢または拒否」が 3,796

件、「性的虐待」が 111 件となっている。

このように虐待を受けた子ども（以下、被虐待児と略記する）の数が増えるにつれ、虐待が及ぼす心理的影響が懸念される。児童虐待の問題に対しては、予断が許されない状況が続いているものと考えなければならない。このような深刻な事態を受け、遊戯療法（淵野，2016³⁾；近藤，2015⁴⁾）や心理療法（片山，2015⁵⁾）、ライフストーリーワーク（才村，2016⁶⁾；高田，2015⁷⁾）、面接によるカウンセリング（大原・楡木，2013⁸⁾；大谷，2013⁹⁾）、ソーシャルスキル・トレーニング（宮内，2013¹⁰⁾）などの技法を用いて、多くの心理的援助が実践

されている。しかし、このような心理的ケアを受けることができた被虐待児は市町村の児童福祉部局又は児童相談所、福祉事務所などを通して紹介された一部にすぎない。通告されたケースは氷山の一角であり、表面化されていない虐待の実態がもっと多く存在しているのかではないかと予想される。

このような内密になっている被虐待児は心理的ケアを受けることなく、虐待を受けた時期を過ぎていき、何事もなく普段と変わらないように振舞いながら成長していくことがある。しかし、人格形成上きわめて重要な意味をもつ人生早期に、愛着を形成する場としての家庭、保護されるべき家族から虐待を受けた子どもが、家族関係をどのように認知し、それが変化するかについて知ることは臨床で大きな助けとなるだろう。

このような被虐待児における家族イメージを把握する手がかりとして、Veltman & Browne (2000¹¹⁾, 2001¹²⁾, 2003¹³⁾ は動的家族画が有効な手段となり得ることを示唆している。動的家族画とは Burns & Kaufman (1970¹⁴⁾, 1972¹⁵⁾ が確立した投影描画法であり、「あなたの家族全員が何かしているところ」という教示からも分かるように、描かれる人物像が行為・動作を伴うという点で従来の家族画とは大きく異なる。それゆえに、被験者のとらえた各家族成員が示す対人態度と、全体として彼の目に映る家族力動を読み取ることを可能にするのである(日比, 1986¹⁶⁾。

我が国では、大和田・阪(2004¹⁷⁾, 2005¹⁸⁾, 2007¹⁹⁾ が動的家族画を用いて被虐待児の特徴を探索的に検討している。しかし、この研究対象となっているのは、虐待を経験した後、家族から離れて施設に入所した子どもであり、施設における人間関係やそこでの治療的介入が、被虐待児の描く動的家族画に影響を及ぼした可能性が否めないという課題が残されていた。したがって、心理的ケアを受けていない被虐待児を対象にした報告とは言い難い。また、先行研究を概観する限り、被虐待後に家族関係認知に変化が生じるのかどうかについての検討した研究は皆無である。

筆者は学校教育現場に携わる中で、ある8歳の女兒とかかわる機会があった。彼女は過去に虐待を受けたが、児童養護施設などに入所した経歴のない子ども、換言するならば、専門機関で心理的ケアを全く受けずにそのまま成長した被虐待児で

あった。彼女はこちらから尋ねたわけではないにもかかわらず、「私、保育園の頃にお母さんに首を絞められて死にそうになったのよ」と親しげに筆者に話かけてきた。深刻な事態を経験したはずであるが、彼女の態度は平然としており、精神的な動揺が感じられなかった。

そこで、本研究では幼児期に虐待された経験をもつが、心理的ケアを受けていない8歳の女兒を対象にして動的家族画(Kinetic Family Drawings: 以下、KFDと略記する)と小栗(1995)²⁰⁾による回想動的家族画(Retrospective Kinetic Family Drawings: 以下、RKFDと略記する)を実施し、虐待を受けた過去と虐待されなくなった現在の家族イメージがどのように描画に反映されてくるか、それはどのような変化を示すのかについての知見を得ることを目的とした。

なお、本研究は一事例にすぎないものの、①筆者が携わった小学校に在籍する子どもであるため、ラポールが形成されやすいこと、②また、人格が形成されるうえで家族からの影響を受けやすいことが予想される年少児が対象であること、③さらに、虐待による死亡事件の摘発者のうち最も多いと報告されている母親(内閣府, 2018)²¹⁾が加害者である対象児が確保されたこと、④母親からの殺意が感じられるような身体的虐待を受けた子どものKFDやRKFDの反応を現時点で報告しておくことは、少なくとも今後の描画研究の臨床的發展に寄与し得る資料としての価値があると判断されたことを理由に研究を継続することにした。

2. 方法

2.1. 対象

小学校2年生の女兒(以下、A児と記す)。プロフィールをTable 1に示した。なお、言うまでもなく事例における対象児の経歴などを資料としての意義を失わない範囲で、変更して記載した。

2.2. 実施者

A児が在籍する小学校に勤務する筆者が実施した。対象児と筆者との交流が十分になされ、信頼関係が築かれたと判断された時期に本調査を行った。

2.3. 場所

落ち着いた雰囲気でもA児の話を聴くことができ

るように、子どもの出入りが少ない特別支援教室で行った。

Table 1. A 児のプロフィール

○学校での様子

・学習面では、すべての教科においておおむね満足できる程度に理解できている。知能指数は79である。

・生活面では、比較的自分から友達に声を掛けることは少ない。時には、気の合う女兒とおしゃべりを楽しむこともあるが、一人でお絵かきをしたり、読書をしたりして過ごすことが多い。

・身近な大人とおしゃべりを好み、自宅での様子や家族のことについて忌憚なく話す。学級担任ばかりではなく、養護教諭や特別支援学級の教員などにも自分から近寄り、話をしたがる。

○家族構成

父親(40歳)、母親(41歳)、長女(17歳)、長男(14歳)、祖父(72歳)、祖母(67歳)、本人(7歳)の7人家族。両親は無職である。A児が保育園に在籍中、母親は精神科に通院していた。その後、入退院を繰り返し、現在は自宅にいる。長女は進学校である高校に在籍している。成績が優秀で東京の某有名大学を受験する予定である。長男も成績が優れており、進学校である高校を目指している。祖父は小学校の元校長、祖母は書道の先生である。祖父母ともにA児に対して厳しく、しつけている。なお、同居していた叔父は36歳という若さで謎の死を遂げている。

○幼児期に受けた虐待の実態

A児の話によると母親に絞殺されそうになり、怖い思いをしたことがあるらしい。なぜ、そのような行為をされたのかは、不明である。ただ、当時は父親と母親との喧嘩が絶えなかったらしく、「そのストレスで首を絞め付けられたのかもしれない」と語っていた。

2.4. 手続き

A児は身近な教師である筆者に自分から声掛けし、学校や自宅での様子を気軽に話しかけていた。そこで、A児が筆者に話しかけて来た際に「今度、ゆっくりとAさんのお話を聴いてあげたいなあ」と声を掛け、事前にアポイントメントを取り、A児と面談した。

2.5. 研究手法

KFDとRKFDを比べると、描画者にとってKFDの方がより自然な家族描画法であると言える。ま

た、実施する際に過去を回想するという課題の影響をKFDにもち込ませないように配慮する必要がある。そこで、KFDとRKFDを組み合わせたKFD・RKFDシステム法(小栗, 2002)²²⁾に準拠し、最初にKFD、次にRKFDを実施した。

(1) KFDについて

KFDの実施にあたっては、A児にA4サイズの白い無地の画用紙と鉛筆と消しゴムを与えた。その後、「あなたを含めて、家族が何かをしているところの絵を描きましょう。マンガとかスティック画ではなしに、人物全体を描くようにしましょう。各々が何かをしているところを思い出して描きましょう」と教示し、それ以外には指示を与えなかった。制限時間は設けずに、それぞれが描き終えた時点で終了した。

実際の描画から得られる以上に有意義で重要な情報を引き出すために、描き終えた時点で「描画後の質問」(Post Drawing Interrogation: 以下、PDIと略記する)を行った。描かれた人物とその人物が何をしているところかを必ず確認したが、それ以外の詳細な事柄についても質問した。

(2) RKFDについて

KFDの標準的な教示を与えた後、母親に絞殺(こうさつ)されそうになった頃を回想させるために「Aさんが保育園にいた時を思い浮かべながら描きましょう」と教示を追加した。

2.6. 分析方法

本研究では日比(1986)²³⁾とBurns & Kaufman(1970²⁴⁾, 1972²⁵⁾に依拠してKFDとRKFDの分析を行った。解釈は主として、「人物像のアクション及び人物像間のアクション」、「人物の特徴」、「位置・距離」、「スタイル」、「シンボル」の5つの領域で判定した。「人物像及び人物像間のアクション」や「人物の特徴」、「位置・距離」では描画者のとらえた各家族成員間が示す対人態度や全体としての家族力動を分析し、「スタイル」では家族成員が抱く不安感や家族関係の不安定さを解釈した。また、「シンボル」を最も具体的な事物に特殊な感情や葛藤などを集約したものとして捉え、精神分析的視点による解釈を行った。

2.7. 倫理的配慮

実施者の所属する当該学校の管理職およびA児とその保護者に対して、口頭にて研究の概要につ

いて説明し、同意を得た。プライバシーの保護には十分配慮し、研究結果は研究目的以外には使用しないこと、事例を特定されないよう十分配慮すること、データの保管と研究終了後の処分、研究協力を辞退する権利等を説明した。

3. 結果と考察

3.1. KFD (Figure 1)

A 児は祖母（上側）と母親（下側）が家の中にいるところを描いた（Figure 1）。描画には主観的な家族認知パターンが投影されることから、普段から二人で過ごすことが多いという生活形態が反映されたと考えられた。祖母は台所で料理をしているらしい。A 児によると、日頃から食事の準備はすべて祖母がしていることから、日常的な生活パターンが描画にそのまま投影されたと考えた。同様に、自宅で休んでいることが多いという母親の様子も、居間でミカンを食べているというリラックスした状態で表現された。このように祖母と母親のみが紙面上に表現されていたことから、二人が家族内での重要な位置を占めていると解釈できた。しかし、PDIにおいて「お母さんとおばあちゃんのことを好きですか」と尋ねた際、「普通。なんとも思っていない」と返答したことから、家庭内が祖母と母親を中心に動いているものの、二人に対して好意を抱いているとは言い難いと考えられた。特に、祖母に関してA 児は窓枠を描くことで包囲を表現した。包囲は、恐怖感を与える人の孤立化または取り除きたいという欲求を意味することから（Reynolds,1978）²⁶⁾、祖母に対して開放的な感情的態度をもっていないことを鮮明に映し出したと言えた。次に二人の表情に焦点を当てると、祖母の表情は少し陰しく、口を一文字に結んでいた。一方、母親の表情は笑っているが、体を横に向けて祖母に背を向けているように見えた。さらに、母親の上部には二人の間を引き裂くように線が描かれていた。これらのことから、母親と祖母の関係は良好ではないと解釈できた。

さらに、A 児の顕著な描画特徴として二点挙げられた。一つ目は描かれた人物である。家族画でありながら、描かれていない家族成員が多かった。母親と祖母以外の父親、姉、兄、祖父は描画から省かれていた。省略された人物像は、描画者にとって描くことに値しない人物として解釈されることから、A 児にとって存在感の薄い家族成員が描

かれなかったと言えた。また、省略は、描かれなかった人物への敵意を間接的に表現したものとして解釈できるケースもあることから、省略された人物像への激しい攻撃性が、当該人物の省略という表現に反映されたと読み取ることができた。その上、自己像も省略されていた。A 児は母親と祖母のみを描いたことから、この二人に対する疎外感を抱いていると読み取ることができた。さらに注目すべき点は、死去した叔父が遺影として描かれていたことである。遺影は口を開け、何かを話しかけているようにも見えた。このことから、存在しない叔父を描かずにはいられないほど、叔父との関係は深く、最も心を許せる存在であった可能性が示唆された。二つ目は描画様式として下線部が描かれていたことである。下部線は、不安定感を解消するための土台として解釈され、崩壊しかけている家庭とか、強いストレス下にある子どもの描画が見られる（日比, 1986）²⁷⁾。よって、A 児が家族関係に端を発する激しい恐怖や不安を感じたり、家族内の雰囲気がよくなく、家族成員間の関係が不仲であると捉えたりしていると解釈できた。

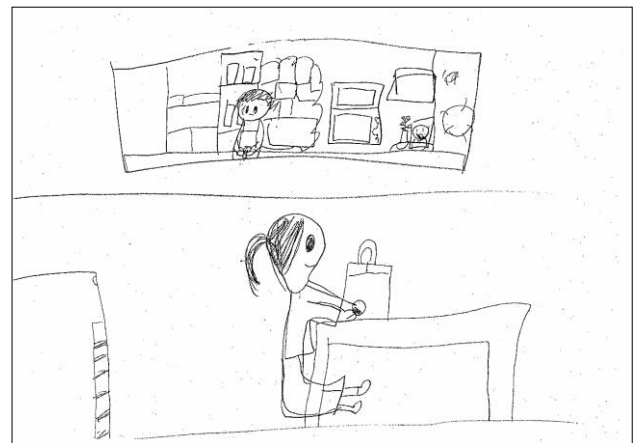


Figure 1. A 児が描いた KFD

3.2. RKFD

A 児が RKFD を描く前に次のような会話がなされた。

教師：A さんが保育園にいた時を思い浮かべながら描きましょう。

A 児：描けない。

教師：急がなくてもいいですよ。待っているのでじっくりと考えてみましょう。

（沈黙）

教師：家族のみんなが何かしているところを描けるかなあ。

A 児：何もありません。

教師：そうなんです。描くことは難しいですか。

A 児：その時は家族がなかったから。

教師はKFDと同様の手順でRKFDを描くように教示した。KFDを描く際はスムーズに描き始めたが、RKFDにおいては「描けない」と迷うことなく即答した。そこで、教師は描くように励ました後、10分間ほど待つが、A児は鉛筆さえ持とうとしなかった。再度、A児に対して描くように促したところ、「その時は家族がなかったから」と描けない理由を呟くように語った。このやりとりから、幼児期のA児の家族は離散状態であったと解釈できた。家族成員間の関係が希薄になっており、家族としてのまとまりに欠けていたと読み取ることができた。また、A児がRKFDを拒んだり、「その時は家族がなかったから」と呟いたりした言動には、幼児期の家庭内の様子を思い出したくない、または、思い出せる状況ではなかったことを意味しているのではないかと考えられた。

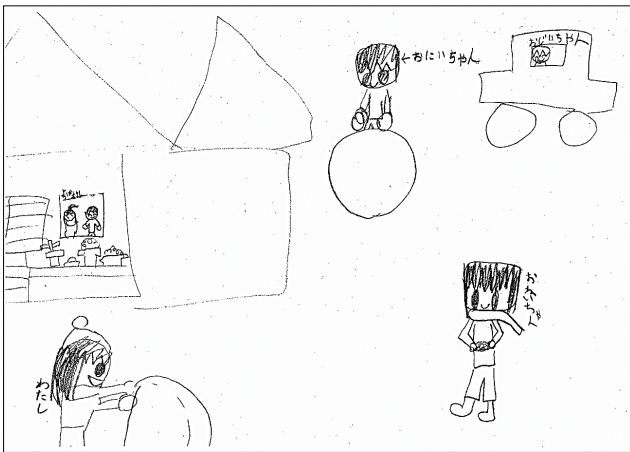


Figure 2. A児が描いたRKFD

その後、A児はしばらく熟考した後、家族が外にいる様子を描いた (Figure 2)。家族成員は上部に祖父 (左) と兄 (右)、下部に本人 (左) と姉 (右) が位置付けられ、中央部には左から祖母、父親という順に並んでいた。全体的印象としては全員が笑っているように見え、楽しそうな雰囲気が感じられた。しかし、それぞれの家族成員に気になる特徴が幾つか見られた。

まず、母親が描かれていなかった。人物像の省略は、他の家族成員と同一場面に置き難いほどの攻撃や不安などの感情を抱いていることを意味し、その人物への敵意を直接表現できない心理状態を暗示している。言い換えれば、虐待の加害者である母親への激しい攻撃性が、当該人物の省略という表現に反映されたと考えられた。次に、祖父は自動車に乗っているように描かれた。自動車というシンボルを使うことで、祖父を取り囲み、分離したい気持ちを巧妙に表現していると言えた。PDIにおいて「おじいちゃんは、どんな人ですか」とA児に尋ねたところ、「いつも怒ってばかりいる。『本を読め』とかと煩い」と答えた。このことから祖父に対して拒否的な感情をもっていると考えられた。同様に祖母と父親を家の中にいるように描くことで、包囲を表現した。包囲は、家族内に非常に混乱した対人関係の存在を示すことから、A児は祖母や父親に対して開放的な感情の態度をもち得ない状況下にあると解釈できた。また、窓の向こうにいる祖母と父親があたかも遺影に見え、二人の前にはお供え物が並んでいるかのように描写された。生存している人物をまるで供養するかのように巧みに表現されていることから、祖母と父親に対する強い拒絶感を抱いていることが示唆された。

さらに、RKFDからきょうだいの不仲を読み取ることができた。本人と兄が冷たさのシンボルである雪で遊んでいること、3人が離れるように距離をあけて配置されていることから、険悪な関係であると解釈できた。また、PDIにおいて「お兄ちゃんとお姉ちゃんはいつも喧嘩をしているから、嫌な気分」と語ったり、以前に「一人っ子になりたい」と話したりしていたことから、円滑ではないきょうだい関係に対して嫌気がさした拒否的な思いが描画に反映されたと考えられた。

これら以外にも、不安定感あるいは家族状況の中での疎外感を意味する足の省略が本人と兄に見られたことや、家族成員が別々の活動をし、人物像間の相互作用あるいは統合性の欠如が読み取れたことから、人物像間のコミュニケーションあるいは関係が希薄であると考えられた。

4. まとめ

KFDとRKFDを比較すると、共通する特徴として人物像の省略が見られた。A児は敵意や嫌悪感

を抱く家族成員を描画に敢えて描かないことで不仲な関係を表現した。人物像の省略は、何らかの理由によって変形された家族関係を体験し、嫌悪感を抱いている子どもの描画特徴として報告されている。例えば、障害児入所施設で生活する問題行動を示す子ども（小西・稲垣，2006）²⁸⁾や学級崩壊の中心となる子ども（小西，2012）²⁹⁾，場面緘黙を呈する子ども（小西，2015）³⁰⁾において家族成員の欠如した状態でKFDが表現されることが多いと指摘されている。以上のことから、虐待を受けたA児においても家族に対する緊張や恐れを感じながら、不安定な家族関係が保育園に在籍していた時から現在まで継続されていると考えられた。

この他にも、KFDとRKFDの両方で家族関係の不和を強調するように包囲を用いて巧みに家庭内での様相を表出されていた。さらに、独特な共通性として、死をイメージさせる遺影や描画技法が認められた。不幸を象徴するシンボルを用いることで、家族関係が悲惨な状況であることを示していると解釈できた。このことから、A児は家族成員に対して否定的な感情を抱きながら家庭生活を送っている状況が幼児期から現在まで続いていると言えた。被虐待経験が表面化されずに心理的ケアを受けることなく過ごしていたため、家族イメージにおいて変化が生じなかったと考えられた。

被虐待児にKFDを実施した大和田・阪(2004³¹⁾，2005³²⁾，2007³³⁾による研究と比較すると、虐待の被害による影響と思われるいくつかの特徴が概ね共通して見られた。「家族成員の欠落・否認」，「家族の分散」，「隠れた攻撃性」，「情感の欠如した家族関係」などに関して同じ特徴が確認された。しかし、本研究との顕著な相違点として自画像の有無が挙げられた。大和田・阪(2005)³⁴⁾は自己像が描かれていない描画が極めて少ないことを報告しているが、A児のKFDには自画像が省かれていた。この違いについて対象児の置かれている状況が影響したと考えられた。大和田・阪(2005)³⁵⁾の研究における対象児は虐待を経験した後、児童養護施設に入所した子どもである。そのため、家族に代わる施設という安住の場で彼らは生活できている。つまり、衣食住を心配することのない、施設職員による愛情に守られた環境下で、心理的ケアを受けられたことが描画に反映されたと考えられた。一方、A児は、心理的ケアを受けていな

いため、「悪い子ども」(西澤，1994)³⁶⁾あるいは「誰からも愛されない自分」，「愛される価値のない自分」(O'Hagan，1993)³⁷⁾といった否定的な自己イメージをもったままいるために、KFDにおいて自己像の省略が生じたと考えられた。このことから、A児が抱く家族イメージに変化がないだけではなく、虐待を受けたことによる心理的外傷によって自分の有用性を見出すことができないままいる可能性が示唆された。

A児は「もう嫌なことはないから、大丈夫」とか「家にいることが楽しい」などと教師である筆者に話していたことがある。しかし、描画を解釈する限りでは、そのように読み取ることが難しいと感じられた。表層面では家族成員とうまく生活しているように思われるが、深層面では多く課題が累積されていると言えた。被虐待児が保育園や学校などで「何でもない普通の子ども」と見られるように努力することも珍しくない。自分の心を守るために否認といった防衛機制を発達させ、家庭内で起こっていることを隠そうとするばかりか、実際にその事実を忘れてしまっているかのように振る舞う(西澤，1999)³⁸⁾。被虐待児は過度の抑制を働かせ、よい子どもとして心の動きを作り上げることで大人からの愛を得ようとする(根本，2003)³⁹⁾。したがって、被虐待児にかかわる支援者は子どもの発言や行動をそのまますべて鵜呑みにすることは危険であろう。表面的はなんらかの葛藤も存在しないかのように思われる場合であっても、子どもの心の奥底にある叫びにも目を向け、多面的に情報を集める必要があると言えた。そして、必要に応じて関係諸機関と連携し、本人への心理的ケアや家族関係への治療的介入を進めていくことが大事であると考えられた。

5. 今後の課題

本研究では、児童養護施設などで子どもが心理的ケアを受けたり、家族への関係諸機関からの介入が全く行われなかったりした特異なケースを携わることができたため、希少な事例を報告することができた。しかし、このように警察や児童相談所などに連絡されていないケースはまだ存在するのではないかと予想される。今後は警察や児童相談所などに通告されていない埋もれた虐待事例に目を向けた研究について盛んに行われることが望まれる。

また、描画研究においては被虐待児の性別や年齢、虐待の程度や種類、虐待が行われた時期など、さまざまな要因によって家族画の内容が異なる可能性がある。したがって、被虐待児の個人的要因を考慮に入れた事例研究がさらに累積されていくことが期待される。

付記

本研究の開始時点で、児童虐待の防止等に関する法律第六条に基づき、速やかに通告義務を果たし、適切に対応した。

参考文献

- 1)内閣府. 平成 29 年度子ども・若者の状況及び子ども・若者育成支援施策の実施状況(平成 30 年版子供・若者白書). 2018.
- 2)警視庁. 平成 30 年上半期における少年非行, 児童虐待及び子供の性被害の状況. 2018.
- 3)淵野俊二. 乳児院における遊戯療法を活用した心理的支援の拡がりー境界性パーソナリティ障害の母親から虐待を受けた女兒の事例を通じてー. 心理臨床学研究. 2016, 34(2), p.184-195.
- 4)近藤淳実. 性的虐待が疑われた女兒のプレイセラピーの経過ー過去と今をつなぐ物語ができるまでー. 箱庭療法学研究. 2015, 28(2), p.29-40.
- 5)片山知子. 心理療法の終結におけるイメージのおさめ方に関する一考察ー児童養護施設における被虐待児童との三つの事例を通してー. 心理臨床学研究. 2015, 32(6), p.673-682.
- 6)才村眞理. 福祉領域におけるライフストーリーワーク実践の現状. 子どもの虐待とネグレクト. 2016, 18(3), p.295-300.
- 7)高田紗英子. 児童養護施設におけるライフストーリーワークの実践. カウンセリング研究. 2015, 48(2), p.105-113.
- 8)大原天青ほか. 児童相談所の一時保護所における攻撃的傾向が強い子どもへの生活場面面接の適用. カウンセリング研究. 2013, 46(2), p.98-109.
- 9)大谷洋子. 一時保護所心理士の役割および虐待を受けた発達障害児への構造的面接の一事例. 明星大学心理相談センター研究紀要. 2013, 7, p.17-27.
- 10)宮内俊一. 問題行動とコミュニケーションー児童養護施設におけるソーシャルスキル・トレーニングの実践と成果ー. 名寄市立大学紀要. 2013, 7, p.37-44.
- 11)Veltman, M. W. M. et al. Pictures in the classroom: Can teachers and mental health professionals identify maltreated children's drawings?. Child Abuse Review. 2000, 9(5), p.328-336.
- 12)Veltman, M. W. M. et al. Identifying childhood abuse through favorite kind of day and kinetic family drawings. Arts in Psychotherapy. 2001, 28(4), p.251-259.
- 13)Veltman, M. W. M. et al. Trained rater's evaluation of Kinetic Family Drawings of physically abused children. Arts in Psychotherapy. 2003, 30(1), p.3-12.
- 14)Burns, R. C. et al. Kinetic family drawings (KFD) : An introduction to understanding children through kinetic drawings. Brunner/Mazel, 1970.
- 15)Burns, R. C. et al. Actions, styles and symbols in Kinetic family drawings: An interpretative manual. Brunner/Mazel, 1972.
- 16)日比裕康. 動的家族描画法ー家族画による人格理解ー. ナカニシヤ出版, 1986, p.44-102.
- 17)大和田攝子ほか. KFD (動的家族画)に見られる被虐待児の特徴. 神戸松蔭女子学院大学・神戸松蔭女子学院短期大学研究紀要. 2004, 45, p.1-14.
- 18)大和田攝子ほか. 被虐待児の動的家族画 (KFD)に関する数量的検討ー描画の様式, 象徴および家族の力動性を中心にー. 神戸松蔭女子学院大学・神戸松蔭女子学院短期大学研究紀要. 2005, 46, p.1-15.
- 19)大和田攝子ほか. 動的家族画における被虐待児の描画特徴ー印象評定を用いた分析ー. 神戸松蔭女子学院大学・神戸松蔭女子学院短期大学研究紀要研究紀要. 2007, 48, p.1-15.
- 20)小栗正幸. 回想動的家族画. 臨床描画研究. 1995, 10, p.32-44.
- 21)内閣府. 平成 29 年度子ども・若者の状況及び子ども・若者育成支援施策の実施状況 (平成 30 年版子供・若者白書). 2018.
- 22)小栗正幸. 回想家族画 (RKFD). 空井健三. 家族描画法ハンドブック. 財団法人矯正協会, 2002, p.138-153.
- 23)日比裕康. 動的家族描画法ー家族画による人格理解ー. ナカニシヤ出版, 1986, p.44-102.
- 24)Burns, R. C. et al. Kinetic family drawings(KFD) :An introduction to understanding children through kinetic drawings. Brunner/Mazel, 1970.

- 25) Burns, R.C. et al. Actions, styles and symbols in Kinetic family drawings: An interpretative manual. Brunner/Mazel, 1972.
- 26) Reynolds, C. R. A quick-scoring guide to the interpretation of children's Kinetic Family Drawings (KFD). Psychology in the Schools. 1978, 15, p.489-492.
- 27) 日比裕康. 動的家族描画法—家族画による人格理解—. ナカニシヤ出版, 1986, p.44-102.
- 28) 小西一博ほか. 知的障害児施設に入所する子どもへの動的家族描画法 (KFD) の試み. 富山大学人間発達科学研究実践総合センター紀要. 2006, 1, p.87-95.
- 29) 小西一博. 学級崩壊の中心となった小学2年生への動的家族描画法 (KFD) の試み. 学校カウンセリング学研究. 2012, 13, p.1-12.
- 30) 小西一博. 場面緘黙を呈する女兒への動的家族描画法 (KFD) の試み. 臨床描画研究. 2015, 30, p.115-125.
- 31) 大和田攝子ほか. KFD (動的家族画) に見られる被虐待児の特徴. 神戸松蔭女子学院大学・神戸松蔭女子学院短期大学研究紀要. 2004, 45, p.1-14.
- 32) 大和田攝子ほか. 被虐待児の動的家族画 (KFD) に関する数量的検討—描画の様式, 象徴および家族の力動性を中心に—. 神戸松蔭女子学院大学・神戸松蔭女子学院短期大学研究紀要. 2005, 46, p.1-15.
- 33) 大和田攝子ほか. 動的家族画における被虐待児の描画特徴—印象評定を用いた分析—. 神戸松蔭女子学院大学・神戸松蔭女子学院短期大学研究紀要研究紀要. 2007, 48, p.1-15.
- 34) 大和田攝子ほか. 被虐待児の動的家族画 (KFD) に関する数量的検討—描画の様式, 象徴および家族の力動性を中心に—. 神戸松蔭女子学院大学・神戸松蔭女子学院短期大学研究紀要. 2005, 46, p.1-15.
- 35) 大和田攝子ほか. 被虐待児の動的家族画 (KFD) に関する数量的検討—描画の様式, 象徴および家族の力動性を中心に—. 神戸松蔭女子学院大学・神戸松蔭女子学院短期大学研究紀要. 2005, 46, p.1-15.
- 36) 西澤哲. 子どもの虐待—子どもと家族への治療的アプローチ—. 誠信書房, 1994, p.125-175.
- 37) O'Hagan, K. Emotional and Psychological Abuse of Children. Toronto, University of Toronto Press, 1993.
- 38) 西澤哲. ト라우マの心理学. 金剛出版, 1999, p.113.
- 39) 根本橋夫. 「満たされない心」の心理学. 洋泉社, 2003, p.103-141.

Abstract

This study is a case report examining whether there is a change in the family image held by an abused child who does not receive psychological care. The target of this report is an 8-year-old girl who has been abused in the infancy. It was aimed at obtaining knowledge about how her family relationship perception is reflected in KFD and RKFD, and what features it shows. As a result, the common features were ①omission of family members, ②style of "siege", ③symbols symbolizing misfortune. From this, it is thought that the situation that she sends family life while having the negative feelings for the family member continues to date from the infancy. As she stayed without receiving psychological care, it can be said that there was no change in the family image. Not only that, her drawing suggests the possibility that she could not find her usefulness by psychological trauma due to abuse.

(受付日: 2020年6月26日, 受理日: 2020年9月7日)

小西 一博（こにし かずひろ）

現職：高岡市立五位小学校

新潟大学大学院現代社会文化研究科人間形成研究専攻博士後期課程修了。

専門は臨床心理学，特別支援教育．公認心理師の資格を有し，現在は日本カウンセリング学会，日本教育カウンセリング学会，日本学校カウンセリング学会，日本発達障害支援システム学会，日本教育実践方法学会，鳴門生徒指導学会に所属しながら，教育実践研究を行っている。

主な著書・論文：

小西一博 2021 小学校におけるアスペルガー障害の疑いのある子どもに対する行動論的アプローチー
全校合唱への参加を促す継時近接法による試みー 教育カウンセリング研究第 11 巻第 1 号（掲載予定）

小西一博 2020 知的障害児への昆虫飼育が及ぼす効果についての事例研究 教育実践方法学研究第 5
巻第 1 号 75-82

小西一博 2019 運動会でのピストルの音に過敏に反応する子どもへの支援 学校教育相談研究所（編）
月刊学校教育相談 9 月号 第 33 巻第 11 号 ほんの森出版 18-21